

ニュージーランドの中等学校で活動する間文化的媒介者としてのティーチャーエイド
——オークランドにおける ESOL の実践に着目して——

Teacher aide as the intercultural mediator active in secondary schools in New Zealand : Focusing on the practice of ESOL in Auckland

柿原豪 (KAKIHARA Goh)
成城大学大学院 (Seijo University)

キーワード：移民・難民教育、ティーチャーエイド、間文化的媒介者

1. 本研究の目的

本研究は、ニュージーランドの中等学校の ESOL (English for Speakers of Other Languages) で働くティーチャーエイド (以下 TA) が果たしている、移民・難民の家庭と学校をつなぐ間文化的媒介者 (intercultural mediator : 後述) としての役割を明らかにすることを目的にしている。

ニュージーランドの初等中等教育では、移民・難民など英語を母語としない児童生徒のために ESOL を実施し、公用語である英語の習得を支援している。日本と比較して、制度上ニュージーランドの公立学校は独自の学校運営を行うことができ、学校によっては ESOL の授業で教員と協力して生徒を支援する TA をおいている。TA は英語と在籍している生徒の母語を駆使して生徒の学習を支援しており、その取り組みは移民・難民生徒の英語学習に効果的であるとの指摘がなされてきた (Franken & McComish, 2003)。言語を中心とした学習支援を行うことから、海外出身の TA が多くいると推測される。

そこで本研究では、TA がもっている言語、文化、経験などを活用し、生徒と学校をつなぐ間文化的媒介者としての役割を果たしているという仮説を立てて検討を進めることにした。というのも、オーストラリアの TA が果たす役割についての先行研究 (Howard & Ford, 2007) はあるものの、ニュージーランドの ESOL で TA が果たす役割についてはほとんど明らかになっていないからである。本報告では、上記の仮説を立証するべく、オークランドの中等学校で ESOL の参与観察と、そこで活動する TA に対するインタビューを行ない、そこから明らかになった知見を報告する。

2. 研究対象と方法

本研究では、オークランドの中等学校で働く ESOL の TA を対象とし、2015 年と 2016 年の 7 月下旬から 8 月上旬にかけて調査を実施した。現場で活動する TA の様相を把握するため、調査では授業の参与観察と TA への半構造化インタビューを採用し、そこで得られたデータを分析する。

移民・難民の生徒数が多い 6 校を調査し、ESOL に TA が置かれている 3 校において、調査日に出校していた 7 名の TA にインタビューを行った。表 1 は本調査における調査協力者の基本情報である。

西原はジンメルなどの媒介者概念を念頭に、三者関係における二つの集団の間で橋渡し役となっている媒介者を間文化的媒介者として定義している (西原, 2016)。本研究では、この概念を用いて TA の果たす役割を考察していく。

表 1 調査協力者の基本情報

番号	出身国	性別	年齢	調査日	備考
----	-----	----	----	-----	----

A	アフガニスタン	女性	40代	2015年7月31日	難民出身
B	日本	女性	40代	2016年8月3日	夫の駐在にともなう滞在
C	サモア	女性	40代	2016年8月3日	移民出身
D	日本	女性	30代	2016年8月4日	日本で英語教員を経験
E	ヴェトナム	女性	20代	2016年8月4日	移民出身
F	トルコ	男性	20代	2016年8月5日	大学院（博士課程）で難民について研究
G	ソマリア	女性	20代	2016年8月5日	難民出身

3. 調査結果

インタビューした7名のTA全員がトランスナショナルな移動を経験し、自ら多文化社会を生きてきたことが明らかとなった。TAに資格要件はなく、勤務時間については融通がきく。女性TAの割合が高いが、各校が独自に採用し、1年ごとに契約更新を行っている。採用の方法には、学区内の移民や難民のコミュニティから紹介を受ける場合や、新聞で募集する場合などがある。たとえば、EさんとGさんは母校に勤務している。BさんとCさんはTAとなった理由のひとつに、育児と仕事の両立を挙げた。

TAは基本的に授業に入り込んで学習支援を行う。観察した授業において、TAは生徒に対する母語または英語の支援、学習方法の助言などを行っていた。Cさんによれば、ESOLでは生徒と先生の間で壁ができてしまうことも多く、それを壊してやりとりを円滑にしていくことも仕事である。また移民・難民生徒の家庭で保護者が英語を使えない場合、生徒が家族の代わりに諸手続きを行うこともある。Gさんは、自身の体験をもとに授業以外に学校生活や家庭生活の相談に乗るといふ。

4. 考察

TAは学習面と生活面のいずれにおいても、移民・難民生徒（家庭）と学校の間で橋渡し役をつとめ、両者のコミュニケーションの円滑化を図っている。言語、文化、経験を活用している点において、TAが生徒と学校の文化をつなぐ間文化的媒介者となっているという仮説は立証されよう。学校は移民・難民コミュニティの重要性を認識しており、生徒を支援できる人材を必要としていることがうかがえる。

また、40代以下の女性TAが多い結果が得られたが、その理由として子育て中の女性の場合、ゆるやかな資格要件、融通のきく勤務時間、通勤距離など、仕事に復帰する上での好条件が揃っていることが考えられる。だが、反対に男性がTAとなっていない理由は判然としない。これらを検証するため、今後も調査を継続してデータを集め、この点についても明らかにしていきたい。

【参考文献】

Franken, M., & McComish, J. (2003). Improving English language outcomes for students receiving ESOL services in New Zealand schools, with a particular focus on new immigrants. Wellington: Ministry of Education.

Howard, R., Ford, J. (2007). The Roles and Responsibilities of Teacher Aides Supporting Students with Special Needs in Secondary School Settings, *Australasian Journal of Special Education*, 31, pp. 25-43.

西原和久 (2016). トランスナショナリズムと社会のイノベーション——越境する国際社会学とコスモポリタンの志向—— 東信堂